

## 図書館での思い出—学生時代を振り返って—

経営学部 水野孝彦

図書館の利用の仕方が人それぞれ違うのは当然であるが、そこが大学の中心部であることには変わらない。図書館は、閲覧・閲読、学習、研究、資料収集といった知的活動のための空間を提供している。ここでは、自分の学生時代を振り返り、図書館との関わりについて2、3の思い出を述べることにしたい。

自分にとって図書館が身近な存在になったのは大学3年生の頃である。ゼミ（河合秀敏先生、愛知大学名誉教授）に入ったことがきっかけとなった。河合ゼミは多くの大学教員や会計専門家を輩出した伝統あるゼミとして知られていた。決して無理強いすることのない温厚な先生であるが、ゼミの雰囲気や仲間刺激され、図書館を勉強する場として頻りに利用するようになった。

授業が終わると図書館に向かい、よく閉館までゼミの友人と勉強した。特別なことをしているわけでもないのに、「充実した学生生活を送っている」と自負していたのは、大学は主体的に学ぶ場であるという意味を初めて理解したからだと思う。学習意欲が芽生え、図書館での勉強はとても楽しいものであった。将来への期待と不安を抱えるなか、とにかく切磋琢磨することで、少しでも自分を向上させようとしていたのだと思う。

大学院に進学して、図書館は2つの意味で欠かせない存在になった。1つは、当然のことだが研究資料を収集する場である。院生になると、資料収集のために足繁く図書館に通った。過去の議論を歴史的に体系づけていくことが自分の研究スタイルであったため、和洋問わず、古い専門雑誌や書籍を必要とした。ほとんど手付かずの古い雑誌や洋書を手に取り、彼方此方ページをめくっては

探していた記述を見つけることに楽しさを覚えた。幸い愛大図書館には自分の研究にとって必要な資料の多くが揃っていた。必要な資料が図書館にないときにはレファレンスカウンターに相談し、他大学や海外から取り寄せるなどして入手した。レファレンスは資料に困ったときの駆け込み場である。迷える訪問者のために即座に端末を開いてお目当ての文献を検索してくれる。親切で頼り甲斐のある存在だ。

もう1つは、アルバイトをしたことである。週2、3回程度メディアゾーンのカウンターで受付業務に就くことができた。学内でアルバイトができることほど有り難いことはない。移動時間を気にせず、僅かながらにも経済的支えを得ることができからである。業務自体はそれほど複雑ではなかったが、出入り口に一番近いカウンターであるため、外来者に対応したり、雨の日の傘持込みやセンサーの感知に対処したりするなど重要な仕事があった。

図書館はこのように自分にとって学習の場であったり、資料収集や仕事をする場であった。そういう場があったおかげで、学習意欲を燃やすことができたと思うし、研究に専念することができたと思う。ただ今思うと、目の前の目的を果たすための限られた利用でしかなかったといえなくもない。図書館をもっと広く利用して、自分の専門以外の分野、たとえば文学、歴史、哲学、宗教などの学習に取り組むことも大事ではなかったかとも思う。遅まきながら、こうした分野における知識の重要性を感じるようになった。大学の中心部である図書館をもっと上手に活用する方法を考え出すことが今後の課題になりそうだ。